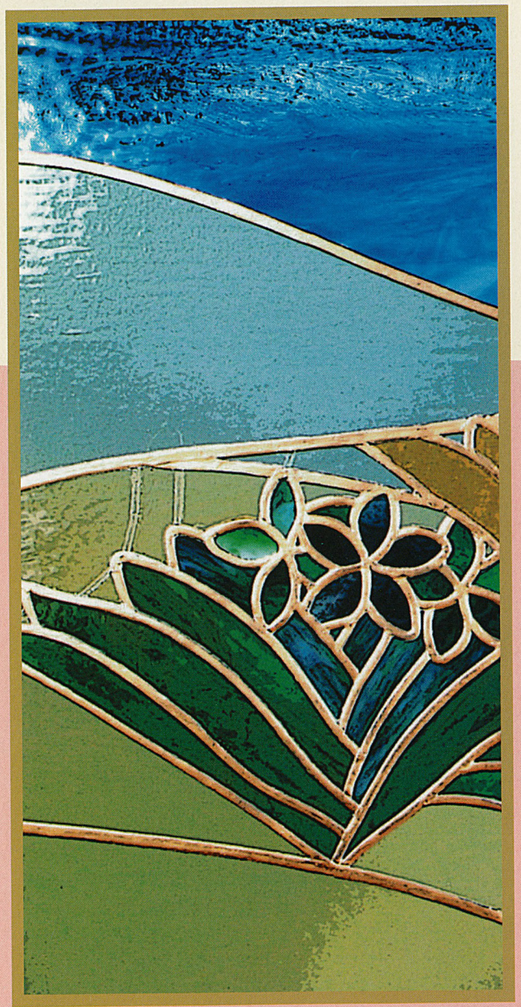
MEIJI MURA

明治村だより

Vol.51 2008 Spring

芝川邸に使用されたタイル復原を通して　後藤泰男　2
明治日本人の血を引くフラガール　本田正文　5
明治村みらいプロジェクト　6
機械遺産・近代化産業遺産のご紹介　8
春の催しもの　10
A La Meiji-mura　11







平成 20 年 3 月 27 日発行
「明治村だより」第 51 号（平成 20 年　春）

発　行　博物館明治村
〒484-0000　愛知県犬山市内山一番地
電話（0568）67-0314
http://www.meijimura.com
製　作　大日本印刷株式会社

『明治村 だより』　第 52 号発行のお知らせ
発行時期　平成 20 年 7 月初旬（予定）
申込方法「明治村だより」第 52 号ご希望の旨及びご住所・お名前を明記の上、送料 140 円切手とともに封書にてお申し込み下さい。



表紙　芝川又右衛門邸 1 階ステンドグラス

お詫び
先号（Vol.50）に下記の誤りがありました。
お詫びして訂正いたします。

	誤	→	正
10 ページ	野村　得斎	→	野村　得庵

芝川邸に使用されたタイル復原を通して

INAXライブミュージアムものづくり工房
後藤 泰男

はじめに

芝川又衛門邸には、表1に示すような多くの種類のタイルが使用されていました。明治四十四年に武田五一の設計により創建した芝川邸は、平成七年の阪神淡路大震災による被害にあうまで何度か改造されたそうです。今回の明治村への移築に関しては、外観は昭和八年に刊行された『武田博士作品集』に掲載されている写真の姿に可能な限り復原することとし、建物内部については解体当時の仕様を参考とした上で旧仕様が判明する部分についてはその復原を行うという方針で復原が行われました。したがって、タイルの復原は解体時に保存されたタイルと解体時の写真を元に復原しました。本報では、解体時に保存されたタイル復原を通して感じたことをまとめました。

芝川邸創建時の日本のタイル事情

タイルとは英語のTileから来た単語で、建築仕上げ材として用いられる陶磁器の板のことを指し、幕末から明治維新にかけて西洋建築と共に日本に伝わった言葉です。江戸時代以前の日本に建築仕上げ材としての陶磁器の板がなかったわけではなく、七世紀末に大陸から瓦を作る技術が伝わり、瓦を床に使用した敷き瓦やなまこ壁に代表される腰瓦などが、寺院、城郭、武家屋敷や土蔵などに使用されていました。しかしながら、文明開化の波と共に西欧から伝わったタイルは、それまでの敷き瓦や腰瓦とはまったく性格を異にし、その装飾性に富んだ意匠は西洋建築を代表する素材でした。そして、新しいタイル製造技術も明治維新と共に日本へ伝わっています。明治元年に来日したドイツ人化学者G・ワグネル博士は、近代的な窯業技術を日本に伝えるとともに、明治時代後期には自らも「旭焼き」という美術タイルの製造販売をしていました。

しかしながら、タイルが日本の住宅で一般的となり生活の中で意識されるのは、昭和になってからのことでした。古来よりわが国の住宅は柱と梁を基調とした木造住宅であり、湿度の影響からくる開け放しの室内では壁の面積が小さく、また侘び寂びの思想から日本建築の壁は、一幅の掛け軸、一輪の花を引き立てるためのものであって、決してそれ自体自己主張しようとはしなかったことが、タイルが普及しなかった理由と考えられます。これに対し西欧の煉瓦造り住宅では、室内は壁の中に窓があるという閉鎖的な空間であり、壁に対する認識は強烈で特に居間の中央に据えられた暖炉の装飾タイルは日本の掛け軸の役割を果たしていたとも考えられます。また、床にしてもわが国は多湿のため高床式の畳による座臥的生活の習慣に対し、西欧では腰掛け的、寝台的生活であり、それだけ床に対する認識も当然異なっていました。

まさに芝川邸創建の明治時代終盤のころは、タイル製造の歴史あるいはタイル使用の歴史の中の黎明期ともいえ、タイルが装飾的耐久素材として、建築の大小を問わず各所に採用しようとする風習が、習慣的に育っていく土台となった時代でもあります。

芝川邸使用タイルからわかること

1階の暖炉の側壁前面にあるアールヌーボー調の睡蓮の花模様のマントルピースタイル（写真3）は、英国のヴィクトリアンタイルです。このマントルピースタイルは状態も良いことから、現物をそのまま使用するためにモルタルで覆われた裏面を確認することはできませんでしたが、暖炉前の床に使用される濃青色のタイルはモルタルを剥がして裏面を確認することができました。ヴィクトリアンタイルの裏面には、特徴のある裏足パターンと一緒にメーカー名等が刻印されていることが多いのですが、このタイルの裏面には残念ながらメーカー名の記載は無く「1673」という数字が刻印されていただけでした（写真7）。また、当社が保有するヴィクト



写真３　１階暖炉
（側壁前面の装飾タイルはオリジナル品を使用）



写真２　バルコニー腰壁のオリジナル品と復原品



写真１　１階バルコニー
（床と腰壁のタイルを復原）

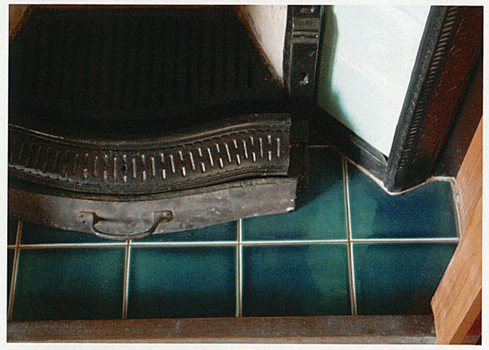


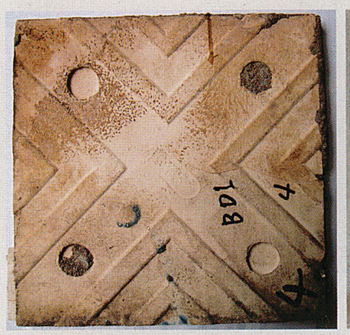
写真５　２階暖炉前床
（1階暖炉前床はオリジナル品を使用し、２階は復原品を使用）



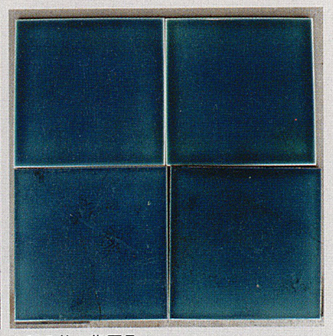
写真４　２階暖炉
（側壁前面の装飾タイルはオリジナル品を使用、暖炉前床と上部前面のタイルは復原品）

表1　芝川又衛門邸　解体時使用タイル

使用部位	写真	形状	色	現物の有無	使用面積	備考
1F　バルコニー　床	写真1	108×108	赤茶色	有	約 50㎡	復原
1F　バルコニー　腰壁	写真2	220×45	白～茶混色	有	約　4㎡	復原
1F　浴室　床		152×152	白色	無	約 44㎡	昭和期に修復した可能性が高く復原の対象とはしない。
1F　浴室　壁		152×152	白色	無		
1F　トイレ　床		50×50	白色	無	約　2㎡	
1F　トイレ　腰壁		100×100	ピンク色	無	約　3㎡	
1F　暖炉側壁粧飾用	写真3	152×152	睡蓮の花模様	有	5枚組×2	現物利用
2F　暖炉側壁粧飾用	写真4	152×152	水色	有	5枚×2	現物利用
1F・2F　暖炉前床	写真5	152×152	濃青色	有	52枚	現物＋復原
2F　暖炉上部前面壁	写真4	152×152	山吹色	無	20枚	復原
2F　洗面所　床	写真6	105×105八角形 35×35	白色 黒色	有	約　4㎡	現物＋復原
2F　洗面所　腰壁		108×108	白色	無	約　3㎡	復原
2F　トイレ　床	写真6	105×105八角形	白色 黒色	有	約　4㎡	現物＋復原
2F　トイレ　腰壁		108×60	白色	無	約　2㎡	復原

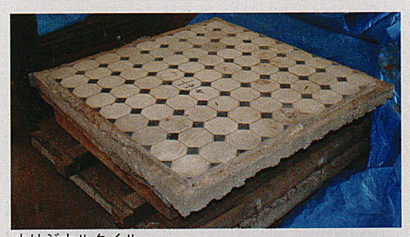


オリジナルタイル裏面



上段2枚　復原品
下段2枚　オリジナルタイル

写真7　暖炉前床タイルの裏面と復原品の色合い比較



オリジナルタイル



オリジナルタイルを洗浄後再利用し、不足部分に復原タイルを使用

写真6　2階トイレ床のオリジナル品と復原品
（2階洗面所床も同じタイルを使用）



写真8　バルコニー床タイルと2階トイレ・洗面所の床黒色タイルの裏面

リアンタイルの裏足パターン集との整合性を調べてみたところ、ヴィクトリアンタイル大手メーカーである MINTON 社の裏面に4桁の製造番号を記載する裏足パターン例と類似する点はありましたが、同社のものであると特定できるまでには至りませんでした。

また、バルコニーの床タイルと2階洗面所とトイレの床に使用されていた黒いタイルの裏面からは、共通の裏足模様（写真8）を確認することができました。この裏足模様からもメーカー名を特定するまでには至りませんでしたが、2階洗面所とトイレの八角形白いタイルの四隅に黒い四角形のタイルを配置するパターン（写真6）は、ヴィクトリアンタイルに多く見られる施工例であり、バルコニーの床タイルと共に創建当時に英国から輸入して施工されたものと推測します。

バルコニーの腰壁に使用されていたボーダータイル（写真2）は、粘土分の多い原料を水分の多い状態で成形し施釉後焼成したもので、当時の輸入タイルの製造方法（粉末プレス成形）とはまったく違った手法で作られています。武田五一は岐阜県の名和昆虫研究所記念昆虫館を設計（明治四十年竣工）の際に、常滑のタイル製造工場に足を運び、タイル製造方法を指導したという記録があります。このバルコニーの腰壁タイルもまた、武田五一と緻密な打ち合わせにより製造された国産のタイルと考えています。

おわりに

和と洋の融合した建築を目指した武田五一が、洋を代表する建築素材であるタイルを日本建築に用いたのは必然だったのかもしれません。特にタイルの復原に関わり、移築竣工された芝川邸を見てもっとも興味の深い箇所は、2階の和室にある暖炉でした。西洋建築における暖炉の持つ役割を、日本建築の中の床の間と比較して論じる建築史家も多い中、和室の襖の中に暖炉を配置した武田五一の感性の豊かさを改めて感じたものです。特に暖炉側面のマントルピースタイルに、1階暖炉のアールヌーボー調の装飾タイルではなく、水色の淡色のタイルを用い、暖炉の上部に日本的な山吹色のタイルを張りつけた理由を武田五一に聞いてみたいものです。日本の住宅建築に、タイルが使用され始めたのはこのような時代の先駆的な建築があったためであることを改めて痛感させられました。

最後になりましたが、このような機会を与えていただきました博物館明治村の関係者に改めて感謝いたします。ありがとうございました。

ごとう・やすお

明治村錦絵れきし探偵団

錦絵を片手に、明治を探る旅に出かけよう！



博物館明治村では、錦絵と建物に関する問題を解きながら村内を回る、「明治村錦絵れきし探偵団」が始まりました。

当館は、約2000点の錦絵を収蔵しています。錦絵とは、木版画のうち、多くの色を使った浮世絵版画のことで、江戸時代中期に鈴木春信によって始められたと考えられています。浮世絵とは、当時はやりの風俗（「浮世」には「当世」「現代」などの意味があります）を題材にした版画、もしくは絵（「肉筆浮世絵」と呼ばれます）です。明治時代に入ると、錦絵で使われる色の種類も更に豊富になり、テーマもより話題性のあるものが選ばれるようになっていきました。錦絵はその当時の風習を描きこんだ、記録写真や広告媒体のようなメディアの役目も果たしたと言えるでしょう。そこで、錦絵を見ながら、明治時代に建てられた建物の中でどのように暮していたのかを思い描いていただこう、というのがこの「明治村錦絵れきし探偵団」のねらいです。

今回選ばれた錦絵は12種類あり、例えば、芝居に関する錦絵を呉服座（大阪池田市にあった、江戸時代の面影を残す芝居小屋・4丁目49番地）に設置する、と言うように、明治村にある建物と関連のある題材が選ばれています。そして、この12点の錦絵をパネルにして展示し、パネルを見ながら12種類のワークシートにある問題を自分たちで解いて回っていただきます。

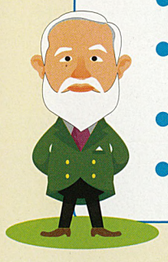
コースは3つあり、西郷隆盛の弟である西郷従道の「従道コース」（1丁目8番地・西郷従道邸）、初代内閣総理大臣の伊藤博文の「博文コース」（5丁目・59番地内閣文庫）、床屋である本郷喜之床に下宿していた石川啄木の「啄木コース」（1丁目47番地・本郷喜之床）と、各々、設置されている建物に関連した、明治村にゆかりのある偉人がコースリーダーになっています。しかし、全てを解く必要はなく、好きな建物、好きなテーマだけを選んで解いて回るのでも構いません。

最後に、明治村は敷地が広く、建物数も多いため、どのように見学して良いか分からないという声をよく耳にします。実際は、どのように回って頂いても構いません。重要文化財だけをじっくりと見たり、商業施設だけをじっくり見たりと、見学の仕方は十人十色ですが、この「明治村錦絵れきし探偵団」を行うことにより、どのように回ってよいか分からない人たちにとっての、1つの指針を提示できれば幸いです。

小学校高学年位の方から楽しめるようになっていますので、是非皆さんも明治村錦絵れきし探偵団の一員となって、錦絵を手がかりに明治時代の謎を解き明かす旅に出ましょう。



博文コース



- テーマ：憲法発布
  内閣文庫（5丁目59番地）
- テーマ：開港した都市・神戸
  神戸山手西洋人住居
  （3丁目32番地）
- テーマ：内国勧業博覧会
  名古屋衛戍病院（3丁目37番地）
- テーマ：天皇
  鉄道局新橋工場（1丁目12番地）

啄木コース



- テーマ：髪型
  本郷喜之床（4丁目47番地）
- テーマ：芝居小屋
  呉服座（4丁目49番地）
- テーマ：蒸気機関車
  札幌電話交換局（2丁目21番地）
- テーマ：紡績業
  鉄道寮新橋工場（機械館）
  （4丁目44番地）

従道コース



- テーマ：洋風の服・家具
  西郷従道邸（1丁目8番地）
- テーマ：学校
  三重県尋常師範学校・蔵持小学校
  （1丁目3番地）
- テーマ：音楽
  聖ヨハネ教会堂（1丁目6番地）
- テーマ：電話／煉瓦街・銀座
  札幌電話交換局（2丁目21番地）



はばたけ！ジュニア博物館人

職場体験プログラム

博物館での仕事はどんなもの？

愛知県では平成18年度より「あいち・出会いと体験の道場」として県内の中学生に対して正式に職場体験を推し進めています。以前より明治村では近隣中学校からの要請を受け、職場体験の学生を受け入れてきましたが、年々増加する職場体験に関する要望に応え、今後より多くの学生に、博物館の使命を伝え、理解者を育成していくため、職場体験プログラム「はばたけ！ジュニア博物館人」を開始しました。

このプログラムでは、一般的な社会ルールやマナーだけでなく、明治村の使命である「明治時代の文化や暮らしを広く伝え」、「明治時代の建造物を大切に守り、後世に遺す」という博物館業務を理解していただくことを目的としています。

建物ガイド体験「建物のメッセージ伝え隊」

明治村の存在理由を理解し、建物を保存展示することの重要性を見学者に分かりやすく伝えます。各建物にこめられた明治の人々からのメッセージを発信し、さらにお客様と接することで、言葉遣いや礼儀作法を学びます。

西郷従道邸、東松家住宅、西園寺公望別邸「坐漁荘」、呉服座、高田小熊写真館、芝川又右衛門邸のうち1棟の建物ガイドとともに、展示建造物のチェックや清掃なども行います。



建物修繕体験「文化遺産遺し隊」

明治村の展示建造物が、「移築された明治時代の建物」であることを理解して、物を大切に扱い維持することの重要性を学びます。
文化財を後世へ遺すためには、一般の見学の方は普段あまり目にすることができない日常点検と、それによる初期修繕が非常に重要です。村内各所の展示建造物などの点検と簡単な修理を中心に行います。



申し込み方法

電話にて学校名・日時・学年・人数・連絡先等を実施予定日の2週間前までにご連絡ください。内容などを相談の上、確定します。

「明治村みらいプロジェクト」担当
〒484－0000　愛知県犬山市内山一番地　博物館明治村内
TEL 0568-67-0314　FAX 0568-67-0358　http://www.meijimura.com/

明治村の資料が **機械遺産・近代化産業遺産に認定**されました

●機械遺産に認定

二〇〇七年八月に創立一一〇周年を迎えた日本機械学会より、日本国内の機械技術面で歴史的意義のある「機械遺産」として鉄道寮新橋工場・機械館内に展示されている、左記の二点の資料が選ばれました。

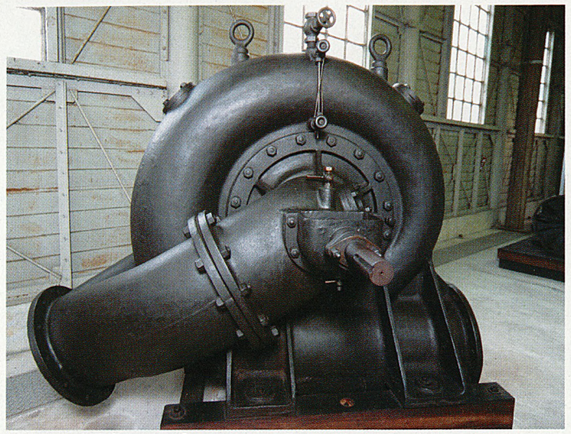
足踏旋盤

伊藤嘉平治作〈東京工業大学　寄託〉

山形出身の伊藤嘉平治は東京で民間最初の機械工場田中製作所を設立した田中久重のもとで機械製作を学び、明治八（一八七五）年頃、帰郷した後に製作したと伝えられるものです。

ぬのくち式渦巻きポンプ

東京帝国大学教授の井口在屋（いのくちありや）が発明し、教え子で後に荏原（えばら）製作所を設立した畠山一清が属していた国友機械製作所が製造したものです。



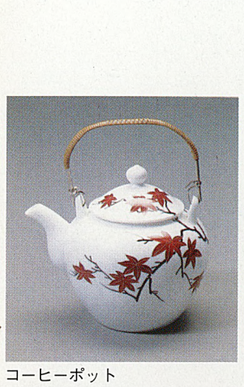
ぬのくち式渦巻きポンプ

●近代化産業遺産に認定

経済産業省により、日本の近代化にまつわる技術史、産業史的に価値ある三十三の産業遺産群の中の二つの遺産群に明治村の下記資料が認定されました。

外貨獲得と近代日本の国際化に貢献した観光産業草創期の歩みを物語る近代産業遺産群

に帝国ホテル中央玄関と明治期ホテル資料が認定されました。明治期ホテル資料の一部は現在帝国ホテル中央玄関および神戸山手西洋人住居（室内は一日一回ボランティアガイドで公開）、長崎居留地二十五番館内に展示されています。



コーヒーポット
（日光金谷ホテル使用）



帝国ホテル中央玄関



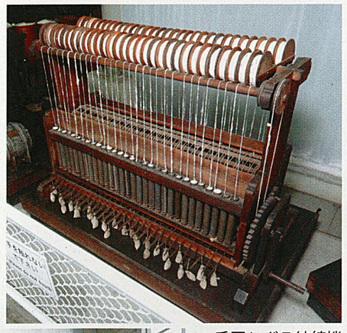
ついたて（帝国ホテル使用）



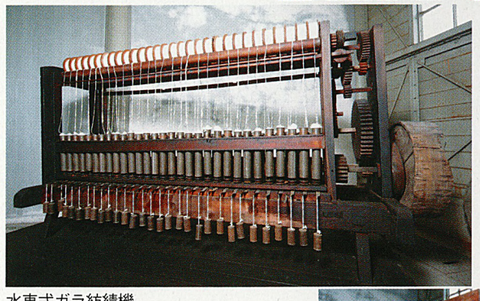
ピーコックチェア（帝国ホテル使用）

我が国のモノづくりの中核を担い続ける中部地域の繊維工業・機械工業の歩みを物語る近代産業遺産群

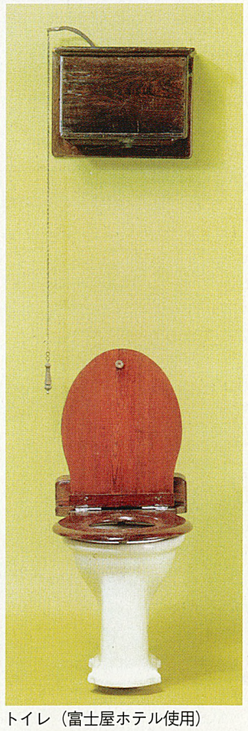
に鉄道寮新橋工場・機械館内に展示中の手回しガラ紡績機・水車式ガラ紡績機・打綿機が認定されました。



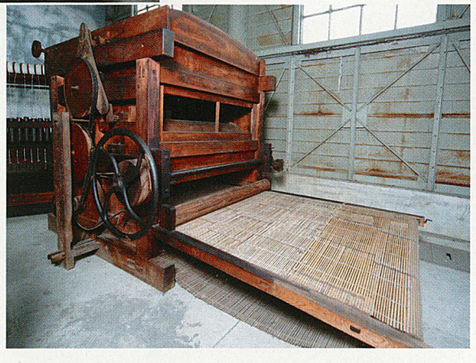
手回しガラ紡績機



水車式ガラ紡績機



トイレ（富士屋ホテル使用）



打綿機

二重橋の鋳物の欄干

●二重橋飾電燈（一丁目11番地）

二重橋飾電燈は、明治十九（一八八六）年十月から明治二十一（一八八八）年十月にかけて建設された皇居の正門鉄橋（二重橋）に据えられた四基のうちの一基です（写真1）。ドイツで製作されており、鋳鉄製で、ネオ・バロック様式の華麗な装飾が施され、グローブを吊す丸鋼には立体的で細かな葉飾りが取り付けられています（写真2）。

この電燈が設置されていた二重橋は一六一四年に木造で架設された際、この場所の濠が深かったため、橋桁を二重に組んでいたことがその名の由来とされています。明治に入り、明治宮殿造営（竣工・明治二十一年）に際して、二重橋もドイツの土木・機械工学士ハイゼ（Heise,W.）の設計で、錬鉄製のフラットアーチ橋に架け替えられました。「皇居御造営誌」『東京市稿 皇城編』第五巻より）によると、この橋の鉄材は、イリス商会東京支店を通じて、ドイツのハーコート（Harkort）社より輸入され、また橋の架設工事、及び欄干の設置は横浜在住オランダ人のストルネブリンク（Stornebrink,I.）がその任に当たったと記録されています。



写真1：二重橋飾電燈



写真2：
鋳鉄製の
立体的な葉飾り



写真3：欄干



写真4：
アカンサスの飾り



写真5：西郷従道邸前にあった飾電燈

飾電燈の設置や架橋は、西洋人主導で行なわれてきましたが、橋の欄干の製作は埼玉県川口市の鋳物師・永瀬庄吉（一八五七―一九四五）が行ったと言われています。川口鋳物は、江戸時代から鍋・釜・鉄瓶といった日用品鋳物の産地としてその名を知られていました。永瀬家はそこで古くから続く鋳物師の家系で、明治七（一八七四）年、庄吉が工部省赤羽製作局のお雇いイギリス人キング（King, A.）より西洋式生型法や溶解炉操業法など西洋の新しい技術を学んだことにより、皇室や東京市の大型水道管の鋳造などの公共の仕事を数多く手がけ、特に鉄柵を得意とする大工場となりました。キングは工部省工学寮の模型師として来日し、明治六（一八七三）年から明治八（一八七五）年まで赤羽製作局に勤めていた人物です。

赤羽製作局より戻った庄吉は、明治十（一八七七）年比較的容易な生型法を工場へ取り入れました。以前の鋳造法は砂と粘土水を使って壁土状の型をつくり内部を焼くという、日本古来の焼き型法でしたが、生型法は鋳型を焼かずに濡れたままの状態で型を形成し、水分のある間に液状の金属を流し込む鋳造法です。そのため、大小の別なく鋳型を使うことができ、鉄柵などの建築用品や機械の鋳造を効果的にかつ容易に行なうことが可能となりました。

次いで、タタラを踏んでフイゴで堅炭を起こす古来の方法を機械化するため、汽罐鋳造の研究を行い、さらに東京市蒸気船においてその操業法の習得を経て、明治二十年、蒸気機関による扇風機を使用した新しい溶解炉の実用化に成功しました。また庄吉は習得した技術を自らの工場だけではなく、川口の鋳造業界全体に広めました。二重橋の欄干を製造した時期は庄吉が新しい技術を習得した時期と重なり、恐らく蒸気機関による溶解炉を使用し、生型鋳造法を用いたものと考えられます。

欄干のデザインに目を向けると、親柱には西洋風のアカンサスやイオニア式の柱頭に似たデザイン、上部に擬宝珠、手すり部分には唐草透模様が鋳出され（写真3）、仕上げにペンキが用いられているのがわかります。また、欄干の塗装工事のため、これまで厚く塗りこめられていたペンキの下から、細かなアカンサスの葉脈やその装飾の詳細を確認することが出来ました（写真4）。意匠デザインを行った人物は未だ詳らかになっていませんが、庄吉には、デザイナーの意図を汲み取り、細かな部分まで鋳出することの出来る確かな技術があったといえます。

明治十九年十月六日付けの東京日日新聞には、「…欄干其他の彫鏤結構は目を驚かす美麗なるもののよし…」と報道され、二重橋の新しい構造に関してだけでなく、欄干の装飾技術の見事さについて触れられています。こうした評価を受けるだけの細かな装飾を施すことが出来た背景には、川口の一鋳物師であった永瀬庄吉による鋳造技術の革新があったと言えます。

この飾電燈と欄干は、東京の皇居前から移築された当初は西郷従道邸前に設置されていました（写真5）。現在は三重県庁舎と対峙する場所に移され、夜間公開時にはあかりが灯され、幻想的な雰囲気を醸しだしています。ドイツ製の洗練された立体的な飾電灯の装飾と、やや平面的な印象を受けますが、日本人の手によって製作された欄干の装飾を対比してみてはいかがでしょうか。

GWは延長開村します！ 5月3日（祝）～5日（祝）

ゴールデンウィークの5月3日(祝)～5日(祝)は夜19:00まで延長開村いたします。また期間中は17:00以降に入村された方は入村料金が半額です。

GWコンサート

5月3日(祝)、4日(祝)　出演／フルートアンサンブル　シーズン・フォー
5月5日(祝)、6日(休)　出演／プライナス
各日　13:00～、15:00～　＜聖ザビエル天主堂＞